

高橋誠一郎著『「罪と罰」を読む』（刀水書房、一九九六）

著者は東海大学文学部の卒業生で、同大学の外国語教育センターの助教授である。

本書は一般教養の学生を相手にして出来るだけ『罪と罰』を厚みを持たせて読ませるという意図の下に行われた講義が土台になっている。その際、副題『「正義」の犯罪と文明の危機』に示されるように、読解に文明論的視点を取り入れている点が斬新である。そのために、わずか一七一ページの小品にもかかわらず、東西を問わず、数多くの思想家、作家また実在の人物、作中人物への言及がなされている。その博引旁証ぶりにもかかわらず著者の巧妙な語り口によって面白く読める本でもある。

この内容の濃い作品の全容を限られた紙数で紹介することは出来ない。問題を絞って論じさせてもらう。

先ず著者は一九世紀後半の西欧社会、そして西欧化されつつあったロシアは過渡期として危機を迎えていたという歴史認識の上に立

ち、『罪と罰』は、ドストエフスキーが、この危機の原因として近代西欧文明の基本原理を批判したものである、ということを前提として読解を始める。そして、このロシアの作家の批判は現代文明の危機を乗り越える際にも充分、傾聴すべきところがあるとする。

次に、当時の現実として物質的に豊かな社会が実現したにもかかわらず、大多数の者は貧困にあえいでいることが指摘される。この不正な社会を正すにはどうすればよいか。この問題に正面から取り組むのが本人自身、優秀な頭脳を持ちながら貧困に苦しむ主人公ラスコーリニコフである。彼は非凡人と凡人の区別の上に、無力な大衆にはこの問題を解決する力はなく、結局は、エリートに委ねるしかないという結論に達する。その際、非凡人は自らの良心に恥ない限り、一切の法や道徳を無視してよいとする。そして著者は、この非凡人の具体的イメージとしてナポレオンがあつたと指摘している。クーデターにより独裁者となり戦争によって多数の命を奪った、い

石井 忠厚

わば犯罪者が英雄と見なされていることに注目する。その英雄視の根柢は、にもかかわらず、ナポレオンは公正な社会の実現に努めたことにあるということであると主人公はある程度事実に基づいた伝説を鵜呑みにする。それゆえ、自らがナポレオンであり得るかを試験するために行われた犯罪が強欲で冷酷な老婆殺しであったわけである。近代西欧の個人主義と合理主義は容易に合法的利己主義に変わり得ることは脇役ルージンに示される通りである。彼もまた優秀な頭の持ち主である。

それゆえ彼らを相手にして正義を実現する人間であるかどうかを知らぬことはラスコーリニコフの義務であったわけである。

著者はドストエフキーの批判的目は主人公の「良心に恥じることがない」という点が問題だということに向けられていることを鋭く指摘する。いかなる良心が問題か。西欧の余りに知的な良心は知性が、あらゆることを理屈によって正当化することを忘れていることに着眼する。正義のための犯罪は個人的野心の実現のためになされる危険がある。西欧の主知主義は感覚、感情を軽視し過ぎた。良心はとりわけ愛の感情に支えられない限り無力である。そして、そのことのつけが、現実には、ニーチェの超人の思想を経て、あの悪名高いナチズムを生んだとするのが著者の見解である。同じく少数のエリートの下に理想社会の実現を目指したマルクスレーニン主義にも適用されよう。

実際ラスコーリニコフは最後まで自分の犯した犯罪を単なる失敗としか見なさず良心に恥じることがないと主張する。しかし彼は感情からの反撃を夢の世界で蒙り、実際の彼の行動は愛によって動かされていることをドストエフスキーは見事に描き出す。逆に、自殺

にまで追い詰められた主人公を救うのは彼の母、妹、友人ラズミール、とりわけソーニヤの愛である。そして著者は指摘し忘れたようだが小説の最後では主人公は福音書を初めて開くという暗示的な場面で終わっている。とはいえソーニヤが教会から拒まれ、彼女自身教会に属する意志のないところから、カトリシズム、プロテスタティズムのみならず、正教にもドストエフスキーが失望しているという指摘は見事である。要はイエスの精神に立脚しなければ真の正義の社会は実現しないということに帰着する。ドストエフスキーはロシア中心主義的だったという解釈を著者は拒否している。ドストエフスキーははるかに広い全人類の視野に立っている。社会の内部の公正のみならず異国間、異文明間の摩擦も隣人愛の原理に基づく限り、殺人はいかなる理由付けがあろうと正当化され得ず、そこには戦争のない共存の原理に基づいた多様な文明・社会が実現されるであろう。

もうひとつ簡略ながら指摘しておきたいのは、合理主義とその適用である科学技術の背景にある自然支配の思想までドストエフスキーの視野に入っていたという著者の指摘である。

確かに流刑地シベリアにおける自然の雄大さに都市を志向した主人公が改めて感動する場面の描写は、この解説を裏付けるものである。人間中心主義への批判も考慮に入っていたわけである。

ただ、最後に若干の不満も述べさせてもらいたい。

一つは、視点の新鮮さにもかかわらず作品解釈において他の研究者のそれに頼り過ぎている傾向が見られることである。具体的には、とりわけスヴィドリガイドフ、ソーニヤの解釈が不満である。

もう一つは著者自身が認めているように、デカルトとニーチェの

解釈である。彼らのテキストを読めば著者のような偏った解釈は生まれまい。

—— 原典重視を貫き自分独自の立場をもっと打ち出してくれば、更によい作品となろう。

今のままでは面白い読みものに過ぎないと言われても仕方ない一面がある。